

原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254  
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1996

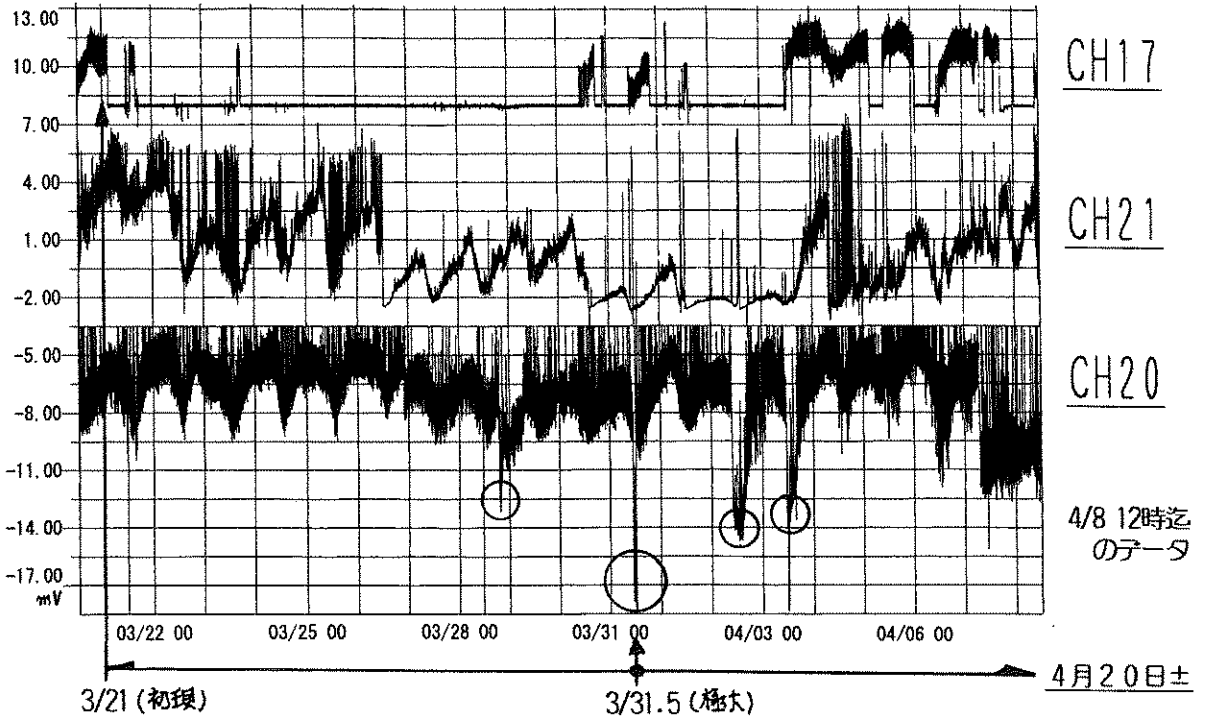
No.1778 長期継続特殊前兆続報 初現・極大を誤認していた見解 初現=3/21 極大=3/31.5の可能性

No.1778前兆とNo.2710前兆共通前兆として、新たなステージが観測されている認識です。  
前情報では、CH20の電圧顕著低下時(3/31と4/3)を極大の可能性とし、CH21の糸状特異の開始時期を初現と考えた場合は、二つの極大ともに、4月9日±を示す計算結果となったため、この関係認識の可能性を考えました。

仮に4月9日±が正しく対応地震発生時期である場合は、誤差を含めても4月8日昼迄には前兆が静穏化することが計算され、これを確認することが重要であることも報告致しました。

★本日4月8日午後段階で、継続していたCH21の特異状態は継続出現しています。このことから、まず4月9~10日の発生の可能性は否定されます。次に現在迄の認識で示された時期に新規前兆初現が発生する可能性についてですが、本日までの上の3観測装置の基線変化を見て、現在迄の初現~極大認識が間違っていた可能性に気づきました。

- ①CH21の糸状近似特異は3/26~4/4 期間に出現している。
  - ②CH20の電圧値低下変動は上のO印の4回観測されており、中心近くの3/31.5のピークが最大である。
- 前述2点が現在迄の初現~極大認識では説明しにくい変化です。

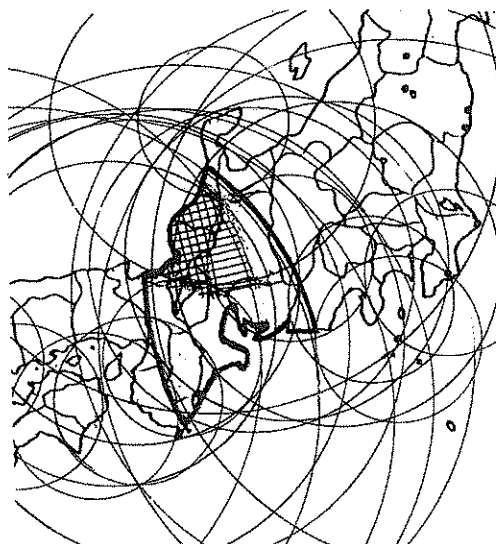


①のCH21の糸状近似基線の出現期間はCH20の電圧低下ピーク出現期間と、ほぼ調和します。現在迄の状況を改めて観ますと、CH20の3/31.5が極大である可能性が高いと再認識できます。これに対する初現は、考えやすいのは3/21から長時間継続の糸状特異が出現したCH17です。

No.2710が3/20±を示していたこと、No.1778は3/24~25を示していたことから、共通前兆の初現=3/21を示していた可能性も考えられます。

3/21初現~3/31.5極大の関係をT<sub>fap</sub>:T<sub>map</sub>=20:13 経験則で計算しますと、4月20日±が計算できます。静穏期間T<sub>pp</sub>=5日間が計算されます。本認識が正しい場合は、4月15日±迄前兆が継続出現することになります。これは対応地震発生日が延びたのではなく、初現~極大の関係を誤って認識していたことが原因で、現在はまだ発生する

筈が無いと云う認識です。早い時期の発生の可能性を考え、細かな変動を初現とし、3/31ピーク後の小ピークに対して同じ時期を示す関係が無いか関係を探ったことが誤認の原因と思われます。大変申し訳ございません。4/7よりCH20の基線電圧値が下がったまま継続しています。これに対して今後極大が出現する可能性もありますので注意して観測します。新認識が正しいか観測を続けて続報致します。



- ◆推定領域：左図太線内領域=大枠推定  
斜線領域=可能性考え易い領域  
ダブル斜線領域=参考推定領域

◆推定規模：M7.8±0.5

◆推定時期：4月20日±2

※但し4月15日±前兆終息確認が必要  
※本認識を修正する観測データや解析内容が得られた場合は続報で修正予定

◇推定発生時刻：午前9時±1時間 (※BTの変化)  
(又は午後6時±3時間) (時刻帯より)

◇推定地震種：震源浅い陸域地殻地震 C) Copyright 2016 YSBO八ヶ岳南麓天文台